

免疫病の主要原因、細胞内感染による系粒体の荒廃と BDORT による共鳴現象について

西原克成 DMSc., DMD.

前東京大学医学部口腔外科教室講師、西原研究所 所長、東京

(Correspondence: TEL: +81-3-3479-1462, FAX: +81-3-3479-1473,

E-mail: nishihara-ken@a.email.ne.jp)

(一)

二十世紀と今日のライフサイエンスは、エネルギー保存の法則に基づいて研究されたことが殆ど皆無に近い。セリエは今から 60 年前に次のようなストレス学説を提唱した。「ある作用因により動物に起きる非特異的生物的な現象の一切をストレス（歪み）と呼び、これが細菌や疲労・飢えや寒冷・打撃・騒音や薬品・化学物質、感動や焦燥など精神的なもの等様々な作用因（ストレッサー）によって誘起される。ストレスはストレッサーの種類によらず同一であり、脳下垂体副腎ホルモン系により、アドレナリン、糖質コルチコイド、ミネラルコルチコイドを介して全身性に作用する」そして脳下垂体の背後に視床が存在し更にその奥には大脳皮質の中樞神経系が控え、副腎系を免疫システムと見て、神経システムと免疫システムの相互依存性を論じている。免疫システムと中樞神経システムは言葉は同じだが、中樞神経系は形態学の解剖学用語であり、ステロイドホルモンの免疫系は、エネルギー代謝の抽象的システムである。この両者の相互作用を同列に論ずることは誤っている。何となれば免疫系の本体であるエネルギー代謝と共役したりモデリングのシステムは、中樞神経の細胞内にも、その他 60 兆箇存在する成熟した赤血球（核と系粒体を持たない）以外のすべての細胞内にも存在するシステムだからである。セリエは、エネルギー保存則に基づいて生命体を定義しないで、質量保存の法則に基づいて形態学的な脳脊髄神経器官と、身体的全細胞に働く機能的システムのエネルギー代謝系を同列視したのである。

(二)

脊椎動物の高等生命体は、内臓腸管系から発生し体壁系が従属するから、内臓を運ぶ vehicle ということができる。神経系は内臓筋肉と体壁筋肉のシステムであり、内臓の希望する方向をセンサーで感知して、その方向に腸管の vehicle を体壁筋で運ぶ。センサーの大半は眼・耳（三半規管・聴器）・鼻・舌・触覚・皮膚・筋紡錘などでエネルギーを感知し、舌と鼻が味覚・嗅覚物質を感知する。エネルギーには光・音・重力・圧力・温熱・寒冷・湿度・接触などがある。これらのセンサーの大半が体壁系のシステムである。一方腸管内臓系は、脳下垂体—副腎ホルモン系を頂点として、主として鰓腸とそれに関連する鰓器の変化したワルダイエル扁桃リンパ輪（5 種類）・上皮小体・肺・胸腺・頸洞と腸管全体の扁桃と全腸管粘膜を窓口としたアクセプターとし

第7回バイ・デジタルO - リングテスト国際シンポジウム特別講演

2006年9月9日(土)東京大学山上会館

て重力・圧力作用から酸素・栄養・毒物のみならずウイルス・細菌・マイコプラズマからスピロヘーターに至るまですべてを受け入れる。こうして太陽エネルギー、月や地球の引力の流れのもとで質量のある物質とエネルギーを取り込んで、エネルギーの渦を廻らせて自らをリモデリングしているのが高等生命体である。これらのアクセプターは脳下垂体・副腎系をはじめとして全てセンサーの働きは持たないが、気圧や温度・湿度のアクセプターのみならずワルダイエル扁桃リンパ輪を窓口として腸内のウイルスと細菌を白血球が取り込んで、リンパ系から血中に導入する質量のある物質とエネルギー両者のアクセプターである。血中に取り込まれたウイルスなど寄生体を含む全ての物質は、身体的全細胞に分配され、細胞内に取り込まれる。

(三)

ウイルスも細菌も共に細胞に取り込まれると細胞内感染を生じ、糸粒体が変性する。生体の全てのエネルギー物質は糸粒体の電子伝達系と酸化の酸化の酸化のもとに生み出されるから、毒物や細菌が細胞内に入れば細胞内の電流系が障害される。神経細胞は筋肉細胞と共役して発生し、両者は対をなして同一システムとして働く。患者の器官の細胞内感染状態は、共鳴現象により BDORT の検者の筋力の強弱で判る。癌を含めて全ての免疫病は多重な寄生微生物の細胞内感染症による糸粒体の障害によって発症するから、BDORT による共鳴現象で判定される。全ての疾病は脳下垂体—副腎内分泌系の細胞内感染に始まるから免疫病の診断に際してはこの二つの内分泌器官の感染状態をよく把握する。

免疫病発症の寄生微生物も栄養も質量の無いエネルギーも生命体にとっては全て等価であり、全てを細胞内に取り込んでエネルギーの渦を廻らしてリモデリングするのが生命体である。糸粒体が細菌の一種に由来することから、脳下垂体—副腎系が窓口となって全てを体内に取り込むのである。この系のミネラルコルチコイドとグリココルチコイドに代表されるホルモン系は副腎皮質と性腺の細胞の糸粒体で合成され、ヒトでは900種類もある。これらは全身の細胞内の糸粒体が標的器官であり、血流・リンパ流を介して直接全身の成熟赤血球以外の全ての細胞のエネルギー代謝を制御しているのである。ステロイド療法は合成されたステロイドホルモンの種類を塗ないし内服か注射するものであるが、これにより副腎と性腺が萎縮し、900種のホルモンの合成が滅茶苦茶に乱れるため、患者はステロイドホルモンに対して禁断症状を呈するようになる。全ての細胞内の糸粒体が過労のために機能不全に陥り、荒廃するためである。回復するには長期間の安静療養を要する。こうしてエネルギー保存則に基づいて脳下垂体副腎系の動物体制のシステムの謎の全容が解明されるとともに、BDORT を活用して効果的に免疫病を治療することが可能となった。